

令和元年9月3日現在

機関番号：32414

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2018

課題番号：26870548

研究課題名(和文)0歳児の養育者支援プログラムの実践と開発評価

研究課題名(英文)Practice and program-development evaluation of a support program for first time mothers who has 2-3 months old baby.

研究代表者

宇野 耕司(UNO, Koji)

目白大学・人間学部・専任講師

研究者番号：60707735

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文): 私たちは、生後2～3か月の赤ちゃんを初めて持つ母親が参加できる「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムの開発と評価を行いました。このプログラムに参加することで、親として成長する力を高め、人とつながる力を高め、子育てコミュニティ感を高め、精神的健康度を高め、自主サークルを作れることが示唆されました。このように、科学的な手続きによって効果があることが示唆されたプログラムです。2019年3月現在、東京都の2市で実践が続けられています。また、ファシリテーター養成も試行的に取り組まれています。今後、他の市でも実施と普及が求められます。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義は、養育者支援プログラムが科学的な手続きによって評価が可能かどうかを明らかにしたこと、試行的評価などを行ったことで、プログラムの効果やプログラムの手続きなどを説明するプログラム理論を明確にしたこと、実施者養成プログラムを開発したことで、効果が示唆される養育者支援プログラムを実施、普及する体制の一部を構築し、プログラムの形成評価を行うための評価基盤を構築できたこと、である。社会的意義は、生後2～3か月児を初めて持つ母親を対象とした養育者支援プログラムを開発評価し、養育者支援プログラムの実施と普及に関する知見を得たことである。

研究成果の概要(英文): We developed and evaluated the "First-time Mothers and Babies program (FMBP)" that mothers who have a two to three months old baby can participate. By participating in this program, it was suggested that the ability to grow as a parent, to enhance the ability to connect with people, to raise the sense of parenting community, to increase mental health, and to create the voluntary mothers and babies circle. In this way, it is a program that has been suggested to be effective in some scientific procedures. As of March 2019, the practice continues in two cities in Tokyo. The facilitator training is also being tackled. In the future, the implementation and dissemination will be required in other cities.

研究分野：臨床心理学 子ども家庭福祉

キーワード：0歳児 親 仲間 育児不安 虐待予防 子育て支援 プログラム プログラム評価

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

日本における乳児期の親支援は、とりわけ子ども虐待の予防の観点から重要である。なぜなら、子ども虐待の結果、死に至るケースがあり、特に0歳児の死亡ケースは他の年齢に比べて高い（厚生労働省、2013）。これまでに、乳幼児全戸訪問事業、乳幼児健康診査、養育支援訪問事業、地域子育て支援拠点事業など予防的・早期発見的支援や制度は充実しつつある。また、地域子育て支援拠点等における具体的な親支援法の開発が期待されているが（宇野、2012）、実際は乳児をもつ親を対象とした養育者支援プログラムはあまりない。特に、初めて子どもを持つ親は、育児に関する不安や自信のなさや負担感があり、このような育児におけるネガティブな感情や社会からの孤立は、不適切な養育（その極端な場合が虐待）に結びつく可能性がある（庄司、2008）。また、その都度、育児に関する問題が解決されないままであることが、その後の養育環境の悪化につながり得る（例えば、原田、2006）。このような問題に予防的に取り組むためには、子育ての仲間作りを促進させながら、母親の育児不安を低減させ、育児の自信のなさを改善することができる養育者支援プログラムが求められる。また、一時的に子どもを預けることで、子どもがよりかわいいと思える経験を行いながら、家族以外の誰かに頼れる体験を提供できる養育者支援プログラムが求められている。

養育者支援プログラムの中に「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムがある。これは、生後2~3ヵ月の乳児を初めてもつ母親を対象としたもので、育児不安や育児負担感の低減、育児スキルの向上、パートナーとの関係性の見直し、そして仲間作り（自主サークル化）を目指した保育付き4回連続講座形式（1クール）のプログラムである。定員は12組（母子）である。プログラム利用者へのアンケートや参加者の様子（観察結果）から、参加者の満足度は高く、参加者の中からは、育児に自信を持てるようになったり、夫に対してやって欲しいことを口に出して言えるようになる人が出てきたり、参加者同士が子どもを預けあえる関係になっていくなどが観察されている。しかし、科学的手法に基づいた評価の対象とはなっておらず、プログラムがどのような因果関係で効果に至るのかなどが明らかになっていない。

2. 研究の目的

本研究は、「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムを科学的根拠に基づいたより効果的なプログラムへと発展、構築させていくために、プログラム開発評価を行うことを目的とした。また、プログラムの実施者（ファシリテーター）を養成するための実施者養成プログラムの開発を行うことを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は5フェーズで行った。第フェーズ：「新米ママと赤ちゃんの会」プログラム開発と試行、第フェーズ：CD-TEP評価アプローチ法（大島、2011）に基づく暫定効果モデルの構築フェーズ、第フェーズ：「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムの実施と試行的効果評価、第フェーズ：「新米ママと赤ちゃんの会」プログラム実施の成果と効果評価、第フェーズ：「新米ママと赤ちゃんの会」実施者研修体制開発であった。

第・第・第フェーズでは、既存モデルの評価可能性アセスメント、予備的プログラム評価、試行的効果評価を行い、CD-TEP評価アプローチ法（大島、2011）に基づく暫定効果モデルの構築・修正を進める。第フェーズは、効果評価を行い、効果的プログラムモデルを構築する。第フェーズでは、研修実施体制を構築し、効果的プログラムモデルを実施・普及させるためのあり方を明らかにする。

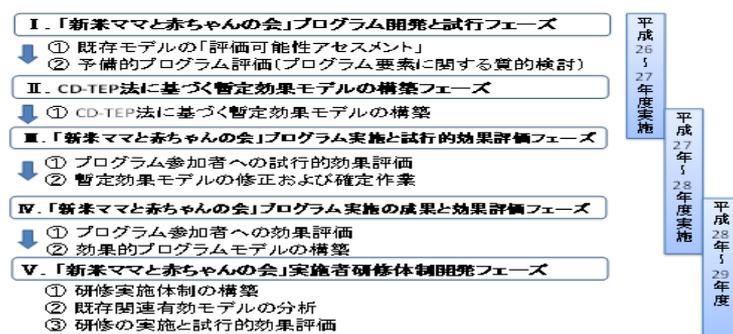


Figure 1 研究進行の手順（5フェーズ）

(1) 「新米ママと赤ちゃんの会」プログラム開発と試行

評価可能性アセスメント

プログラムがプログラムの評価対象となり得るかどうかをアセスメントした。ファシリテーターとの話し合いによってプログラムのニーズアセスメントを行い、プログラムゴールを暫定的に決定した（宇野、2015）。さらに、関連資料を含めて検討を続けた。結果、プログラムゴール、プログラム目標、プログラムニーズは操作可能な概念として記述可能であった（宇野、2016a）。

予備的プログラム評価の実施

1 群事前・事後テストデザインによる方法を採用した。プログラム利用者 93 名（10 クール）のうち、67 名のデータを用いて予備的プログラム評価を行った（宇野，2014）。結果，育児不安スクリーニング尺度 15 項目（吉田・山中・巷野ら，1999）の合計得点の平均値を算出し，実施前の得点（27.53）と実施後の得点（27.52）を対応のある t 検定で比較をしたが有意差は認められなかった（ $t(64)=.48$, n.s.）。子育てコミュニティ感尺度（宇野，2013）の 9 項目の合計得点の平均値を算出し，実施前の得点（28.94）と実施後の得点（31.57）を対応のある t 検定で比較をしたところ，1%水準で有意差があった（ $t(64)=-4.11$, $p<.01$ ）。育児不安を軽減するよりも最適な水準で維持し得るのではないかと考察された。また，孤立した子育てを軽減し得ることが確認できた。つまり，「助け合える関係」を作るきっかけを得る」ことを目的とする本プログラムの妥当性は一部で確認できた。今後，育児不安については再検討を要する。

（2）暫定効果モデルの構築フェーズ

プログラム理論の構築

評価可能性アセスメント（宇野，2016a）の結果とファシリテーターとの協議および関連する資料の分析を踏まえて第 1 次プログラム理論（インパクト理論・プロセス理論）を明示した。

効果的援助要素リスト

作成が完了できなかった。効果的援助要素リストはプログラムの実施マニュアルに不可欠である。しかし，効果的援助要素リストを用いたプログラムのプロセス管理を行っていくほど，組織的基盤，現役のファシリテーターのプログラム評価に関する態度養成が十分ではないと判断し，作成を中止し他の研究課題の遂行を優先した。

実施マニュアルの開発

実施マニュアルの第 2 版の抜粋篇が完成した。第 2 版抜粋篇ではファシリテーションで「何をするか」という観点から整理し，ファシリテーター養成講座用のテキストとして完成した。しかし，「なぜするか」というファシリテーションを裏付ける理論との整合性については，現役のファシリテーターと協議を行いながらさらに明確にしていく課題が残された。

アウトカム指標の設定と活用計画および結果の活用計画

基本的な属性の他に，アウトカム指標は，育児不安スクリーニング（吉田・山中・巷野ら，1999），プログラムの効果に合わせた測定尺度として，親として成長することに関する項目，人とつながることに関する項目，パートナーとの関係に関する項目，子育てコミュニティ感尺度（宇野，2013），日本版 GHQ12（中川・大坊，2013）を使用した。参加者の中に要支援家庭を発見した場合，行政と連携していくこととした。

（3）「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムの実施と試行的効果評価

試行的効果評価

1 群事前・事後テストデザインによる方法を採用した。プログラムの実施前後にアンケート調査を行った（31 クール， $n=175$ ）。使用した指標は育児不安スクリーニング尺度（吉田・山中・巷野ら，1999），自主サークルの数，子育てコミュニティ感尺度（宇野，2013）である。尺度については因子分析および主成分分析を行い実施前後の得点の比較には対応のある t 検定を用いた。目白大学人及び動物を対象とする研究に係る倫理審査委員会の承認を得てから実施した（14-011）。

育児不安スクリーニング尺度得点は実施前では 20.82 点（SD=5.62，得点範囲 10 点～37 点）で，実施後では 20.07 点（SD=5.66，得点範囲 10 点～36 点）であり，実施前の得点の方が有意に高かった（ $t(174)=2.54$, $p<.05$, $r=.19$ （効果量小），得点の差の信頼区間は .17～1.34）。因子ごとに実施前と実施後の合計点の平均値を t 検定によって比較したところ，育児不安因子は実施前では 10.06 点（SD=2.83，得点範囲 5 点～17 点）で，実施後では 10.01 点（SD=3.05，得点範囲 5 点～19 点）で有意差はなかった（ $t(174)=.268$, $r=.20$ （効果量小），得点の差の信頼区間は -.29～.38）。自信のなさ因子は実施前では 10.77 点（SD=3.53，得点範囲 5 点～20 点）で，実施後では 10.06 点（SD=3.27，得点範囲 5 点～19 点）で，実施後の得点の方が有意に低かった（ $t(174)=3.70$, $p<.01$, $r=.27$ （効果量小），得点の差の信頼区間は .33～1.09）。次に，プログラム終了後に名前がつけられたサークルの数は 31 であった。最後に，子育てコミュニティ感尺度得点は実施前では 28.47 点（SD=5.73，得点範囲 16 点～45 点）で，実施後では 31.05 点（SD=6.17，得点範囲 18 点～45 点）で，実施後において有意に得点が高かった（ $t(174)=-6.55$, $p<.01$, $r=.44$ （効果量中），得点の差の信頼区間は -3.36～-1.81）。

育児不安因子は，疲れやストレスによるイライラ，意欲の減退，孤立などで構成されている。これらは本プログラムの参加だけでは軽減されないかもしれない。一方，自信を獲得していくことがうかがえた。グループワークによって自他の育児を知ったり，育児に対するさまざまな気持ちに気づいたり，育児の見通しを持てるようになったからだと考えられる。「自主サークル化」はプログラム目標として最も妥当である。このことは地域における子育ての機能的なコミュニティを作っていることを意味する。子育てコミュニティ感尺度得点の変化は，同じ地域で同じ月齢で初めての子育てであるという共通背景を基盤にグループワークを行うことで個人が

知り合っていく過程を経験し、このような交流や出会いを提供している地域に対する肯定的な感情を持ち得たと考えられる。

暫定効果モデルの検討・修正

評価可能性アセスメント(宇野, 2016a)の結果, プログラムゴールの修正は必要ないことが明らかとなった。予備的プログラム評価(宇野, 2014), 試行的効果評価(宇野, 2018)から, プログラム目標のうち「夫に対する認識の変化」については概念および測定項目の妥当性を検討する必要があった。

(4)「新米ママと赤ちゃんの会」プログラム実施の成果と効果評価

効果評価

1 群事前事後テストデザインと不等価統制群事後テストデザインによる方法を採用した。介入群にはプログラムの実施前後にアンケート調査を行った(N=340)。アンケート未回収率が1.14%(n=47), 中断率が1.18%(n=4), 途中参加率が4.12%(n=14), 有効回収率が80.88%(n=275)であった。有効回収票のうち無効回答率が16.73%(N=275, n=46)であった。有効回答率が67.35%(N=340, n=229)であった。対照群には, 3・4カ月の乳幼児健康診査の利用者に対面による調査委依頼を行い, その場で研究内容の説明を行い同意が得られた利用者アンケート調査を行った(N=146)。無効回答率が19.18%(N=146, n=28), 有効回答率が80.82%(n=118)であった。使用した指標は, 育児不安スクリーニング(吉田・山中・巷野ら, 1999)の他に, プログラムの効果に合わせた測定尺度として, 親として成長することに関する項目, 人とつながることに関する項目, パートナーとの関係に関する項目, 子育てコミュニティ感尺度(宇野, 2013), 日本版GHQ12(中川・大坊, 2013)であった。尺度については因子分析および主成分分析を行い得点の比較には対応のあるt検定と対応のないt検定を用いた。目白大学人及び動物を対象とする研究に係る倫理審査委員会の承認を得てから実施した(14-011)。

親として成長する力(9項目)は, 実施前では28.60点(SD=4.93)で, 実施後では33.47点(SD=4.76)であり, 実施後の得点の方が有意に高かった($t(228)=-16.75, p<.01$, 得点の差の信頼区間は-5.43~-4.29)。介入群(実施後)では33.47点(SD=4.76)で, 対照群では31.01点(SD=5.10)であり, 介入群の得点の方が有意に高かった($t(345)=4.45, p<.01$, 得点の差の信頼区間は1.37~3.55)。

人とつながる力(11項目)は, 実施前では35.30点(SD=10.52)で, 実施後では42.09点(SD=7.81)であり, 実施後の得点の方が有意に高かった($t(228)=-11.59, p<.01$, 得点の差の信頼区間は-7.94~-5.63)。介入群(実施後)では42.09点(SD=7.81)で, 対照群では36.34点(SD=11.10)であり, 介入群の得点の方が有意に高かった($t(178)=5.02, p<.01$, 得点の差の信頼区間は3.48~8.01)。

パートナーに交渉する力(5項目)は, 実施前では17.83点(SD=4.64)で, 実施後では18.41点(SD=4.68)であり, 有意差はなかった($t(228)=-2.23, n.s.$)。介入群(実施後)では18.41点(SD=4.68)で, 対照群では18.43点(SD=5.31)であり, 有意差はなかった($t(228)=-.30, n.s.$)。

子育てコミュニティ感(6項目)は, 実施前では18.96点(SD=4.27)で, 実施後では21.80点(SD=4.56)であり, 実施後の得点の方が有意に高かった($t(228)=-10.10, p<.01$, 得点の差の信頼区間は-3.40~-2.29)。介入群(実施後)では21.80点(SD=4.56)で, 対照群では18.62点(SD=4.38)であり, 介入群の得点の方が有意に高かった($t(345)=6.24, p<.01$, 得点の差の信頼区間は2.18~4.19)。

育児不安スクリーニング尺度(9項目)は実施前では20.10点(SD=5.87)で, 実施後では18.34点(SD=5.64)であり, 実施後の得点の方が有意に低かった($t(228)=6.24, p<.01$, 得点の差の信頼区間は1.21~2.32)。因子ごとに実施前と実施後の合計点の平均値をt検定によって比較したところ, 育児不安因子(4項目)は実施前では8.63点(SD=2.77)で, 実施後では8.21点(SD=2.78)で実施後の得点の方が有意に低かった($t(228)=2.86, p<.05$)。自信のなさ因子は実施前では11.48点(SD=3.67)で, 実施後では10.14点(SD=3.46)で, 実施後の得点の方が有意に低かった($t(228)=7.11, p<.01$)。

育児不安スクリーニング尺度(9項目)は介入群(実施後)では18.34点(SD=5.64)で, 対照群では16.88点(SD=5.44)であり, 介入群の得点の方が有意に高かった($t(345)=2.31, p<.05$, 得点の差の信頼区間は.22~2.70)。因子ごとに介入群(実施後)と対照群の合計点の平均値をt検定によって比較したところ, 育児不安因子(4項目)は介入群(実施後)では8.21点(SD=2.78)で, 対照群では7.48点(SD=2.66)で介入群の得点の方が有意に高かった($t(345)=2.36, p<.05$, 得点の差の信頼区間は.12~1.34)。自信のなさ因子は介入群(実施後)では10.14点(SD=3.46)で, 対照群では9.41点(SD=3.41)で, 介入群の得点の方が有意に高い傾向であった($t(345)=1.87, p<.10$, 得点の差の信頼区間は-.03~1.50)。

日本版GHQ12は, GHQ得点を算出し, 3点以下を健康群, 4点以上を不健康群に分類した(Cut off=4)。介入群では, 実施前の健康群は75.5%(n=173), 不健康群は24.5%(n=56)であった。実施後の健康群は86.0%(n=197), 不健康群は14.0%(n=32)であった。介入群における実施後の健康群の割合は実施前よりも有意に大きかった($\chi^2(1)=8.10, p<.01$)。一方, 対照群の健康群は78.0%(n=92), 不健康群は22.0%(n=26)であった。介入群(実施後)の健康群の

割合は対照群よりも有意な傾向で大きかった ($F(2, 1) = 3.63, p < .10$)。

プログラム終了後に名前がつけられたサークルの数は40であった(2015年8月~2017年3月の期間にA市で20サークル, B市で20サークル)。

対照群との比較の結果, 親として成長する力を高め, 人とつながる力を高め, 子育てコミュニティ感を高め, 精神的健康度を高め, 自主サークルの発生といった変化が確認され, プログラムの介入効果があったことが示唆された。一方, パートナーに関するアウトカムについては, 有意差は認められなかった。育児不安スクリーニング尺度得点については, 介入群よりも対照群の得点が低かった(育児不安や自信のなさ)。今後, 対照群(生後2~3か月)のデータを収集し, さらに効果について検討する必要がある。

効果的モデルの構築

評価可能性アセスメント(宇野, 2016a), 予備的プログラム評価(宇野, 2014), 試行的効果評価(宇野, 2018)から, インパクト理論について再検討が必要であった。特に「夫に対する認識の変化」について利用者がどのような認識をもっているのかを明らかにする必要があった。そこで, 利用者から得られた自由記述を整理し, そこから得られた仮説を基にインパクト理論を再検討し, 再記述した(宇野, 2019)。これを第2次インパクト理論とした。

宇野(2019)で得られた自由記述から, プログラム目標を測定できると考えられる尺度を作成し, あらたなアウトカム評価用紙(第2版)を作成した(2019年4月から導入)。

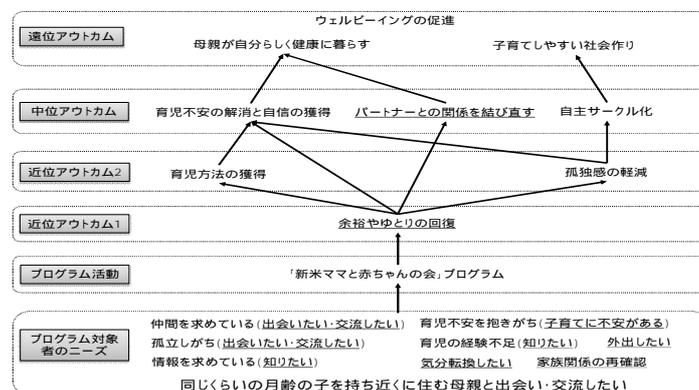


Figure 2 プログラムの第2次インパクト理論(宇野, 2019)

(5)「新米ママと赤ちゃんの会」実施者研修体制開発

研修実施体制の構築

研究協力団体と協議し, 実施普及の必要性について問題意識を共有した。開発検討会を立ち上げ, 検討会議を定期開催し, 研究者が作成した案についてファシリテーターから意見を収集し, 改善した。特に研修目標については, ファシリテーターの態度養成ではなく, 具体的な型を身につけることにした。研修トレーナーはベテランのファシリテーターが行うことにし, ファシリテーター養成の事務局は研究協力団体に置いた。

既存関連有効モデルの検討

研修は知的財産に関係するのでトレーニングマニュアルなど詳細な情報については公開されていなかった。よって, 体系的なレビューはできなかった。しかし, 公開されているファシリテーター養成に関係する情報を整理した。研修体系をステップ(マニュアルをみながら母子別室場面におけるファシリテーションができる), ステップ(見学実習), ステップ(OJTおよびスーパービジョン)とした。本研究期間では, ステップの研修を開発した。

既存関連有効モデルの一つであるノーバディズ・パーフェクト・プログラム(Catano, 2002)のエキスパートへのヒアリングを行った。結果, 普及の前にファシリテーターの質を担保すること, 類似するBPプログラムとの違いを明確にすることなど具体的な示唆が得られた。

研修の実施と試行的効果評価

ファシリテーター養成講座を実施し(1クール, 6名), 養成効果の試行的評価を行った。研修効果のうちレベル1(参加満足度など)およびレベル2(研修の効果)の測定を行った。参加満足度および研修効果が高いという結果を得た。しかし, 参加者の保有する知識やスキルなどの前提条件がバラバラであることから, 研修対象者の定義化と研修内容についてさらに検討が必要であった。研修で身につけて欲しい, 態度および態度に関する考え方については約80%以上の正答率であった。研修の中でファシリテーションを体験して, 体験を言語化し, 言語化された内容を参加者で共有するという体験型研修の手法に基づいた研修内容では, ファシリテーションの知識に乏しい場合, 理解が深められない参加者がいた。すでにファシリテーションの知識やスキルを保有する参加者と, そうではない参加者とを区別した研修が必要であった。

本研究は、「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムを科学的根拠に基づいたより効果的なプログラムへと発展、構築させていくために、プログラム開発評価を行うことを目的とした。また、プログラムの実施者（ファシリテーター）を養成するための実施者養成プログラムの開発を行うことを目的とした。

結果、CD-TEP 評価アプローチ法（大島，2011）に基づいたプログラム開発評価を行った。試行評価等を実施しながら、インパクト理論、プロセス理論、組織計画を具体的に記述することができた。対照群との比較において、インパクト理論で示された仮説を概ね支持する結果が得られた。また、プログラムのインパクト理論で仮定する仮説を測定できる独自のアウトカム評価指標を開発できた。しかし、効果的援助要素リストの作成およびフィデリティ尺度の開発は研究期間内に間に合わなかった。ただし、効果的援助要素リスト作成の示唆を多く得た。今後は、アウトカム指標の妥当性の検討や対照群を用いた不等価統制群事前・事後テストデザインによる調査が必要である。また、実践においては生後2～3か月の時点における養育者支援プログラムとして普及を進めていき、RCT によるアウトカム評価やフィデリティ尺度を使用したプロセス評価などを実施、継続できる実践・研究基盤を構築し、プログラムのエビデンスレベルを高めていくことが求められる。

実施普及の基盤構築の一歩として、実施者養成に着手できた。講師用ガイドブックなどの成果物を出せたことで、今後の実践と研究をさらに継続できる基盤を得た。ファシリテーター養成の体系を明確にすることができ、今後も研修内容の検討が続けられる実践・研究基盤を構築した。プログラムの実践には利害関係者の理解（特に、国からの資金提供）が必要である。今後は、得られた成果をもとにプログラムの実践を継続しながら、エビデンスを高め、国が事後的対応から予防へと政策を重点化した際に、効果的な養育者支援プログラムとしてすぐに実践投入できるように開発・改善・普及に取り組むことが求められる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

宇野耕司 (2019). 「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムの対象者のニーズとプログラムの目標の再検討, 目白大学心理学研究, (15), 1-15. 査読あり

宇野耕司 (2016a). 「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムの評価可能性アセスメント, 目白大学心理学研究, (12), 15-28. 査読あり

宇野耕司・増田恵美子・遠藤みどり・他 (2016b). 初めて0歳児を持つ母親を対象とした「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムの目標に関する検討: 参加者が満足する理由から, 保健師ジャーナル, 72 (3), 230-237. 査読あり

宇野耕司 (2015). 初めて0歳児を持つ母親を対象とした効果的な「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムモデルの開発: 実践家・利用者参画型によるプログラム開発の取り組みから, 目白大学心理学研究, (11), 15-27. 査読あり

〔学会発表〕(計 2 件)

宇野耕司 (2018). 「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムの試行評価, 日本子育て学会第10回大会 日本福祉教育専門学校 (2018年9月16日)

宇野耕司 (2014). 第1子の0歳児を持つ母親を対象とした「新米ママと赤ちゃんの会」プログラムの妥当性の検討, 日本子ども家庭福祉学会第15回大会 新潟県立大学 (2014年6月8日)

〔その他〕

宇野耕司 (2018). 研修者の手引き (簡略版) 宇野研究室 未公刊

宇野耕司 (2018). 「新米ママと赤ちゃんの会」プログラム ファシリテーター養成講座ステップ 講師用ガイドブック 宇野研究室 未公刊

宇野耕司 (2017). ファシリテーター養成講座ステップ テキスト (第2版・抜粋篇) 宇野研究室 未公刊

宇野耕司 (2017). 「新米ママと赤ちゃんの会」プログラム報告会報告書 宇野研究室 未公刊

宇野耕司 (監修) (2017). 「新米ママと赤ちゃんの会」プログラム参加者の感想 DVD 宇野研究室 未公刊

6. 研究組織

(1) 研究協力者

研究協力者氏名: 増田恵美子

ローマ字氏名: MASUDA, Emiko

研究協力者氏名: 伊藤孝子

ローマ字氏名: ITOU, Takako

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。